

農と暮らしの新たな視点を探る

産直コペル

sanchoku coper



特集

令和の コメ騒動 を考える。

“本当においしい蕎麦”とは？—信州 開田高原からの問いかけ—

新連載 直売所の逸品を求めて—車中泊ライター全国放浪記

2025.9
Vol.73



そして、もう1種、花をみると緑色の斑点が花弁にあるので、C.baccatumと同定できる。しかし、前述の通りC.baccatumは日本はおろか、南米以外ではあまり栽培されていない種なのだ。

⑥ C.baccatum種

このC.baccatum種であるが、ベルーの「アヒ・アマリーリョ」という黄色い品種が有名で、その他、「UFO」とか「Bishops crown」と呼ばれる品

今回、中城村で見つけた3品種のうち、CannumとC.baccatumに属するものは「チゴレ」と呼ばれていた。地(チ)の高麗胡椒(コーレーグス)という意味で「チゴレ」

⑦ チゴレ

種は果実の周囲に帽子のつばのような出っ張りがある変わった形であることから観賞用にも使われている。この他のC.baccatumの品種をみても、概ね辛味が穏やかで、大きな果実を付ける品種もいくつかあり、日本でも受け入れられそうに思えるのだが、ほとんど日本では定着していない。私もこれまでに何度もこの種のトウガラシの栽培試験を行ってきたが、どうも、短日性が強い様で晩生品種であることが殆どである。要するに秋になって日が短くならないと花芽を着けないので晩生になるという性質なのである。そのため、日本ではなかなか定着しないのかもしれない。今回、沖縄でこのC.baccatum種の在来品種が栽培されているのを見つけたわけであるが、沖縄には厳しい冬があるわけでもないので、晩生であっても十分に栽培できるのだらう。

ここからは私の推察になるのであるが、実は、明治時代から戦後にかけて中城村は海外への移民が多かった地域でもある。特にハワイ、ブラジル、ポリビア、ベルーへの移住が

⑧ ラジルから？ベルーから？

なのだろうか。実は、中城村にC.baccatumに属する在来品種があることは2013年に沖縄県農業研究センター研究報告に掲載された論文「沖縄県内各地から収集したトウガラシ(Capsicum spp.)の果実特性と分類」に書いてあったので知ってはいたが、「C.baccatumは日本には定着していない」という、トウガラシ学会の、いわば「常識」みたいなものが頭の片隅にあったので、半信半疑などころはあった。今回、現地で栽培されているのを聞いて、さらに、それが近年導入されたわけでもないということとその場で聞いて、このチゴレがこの地域の在来品種であることが確認できた。

多かつたとのことであるが、前述の通り、南米はC.baccatumの分布地域でもあるので、このうちブラジルやベルーから中城村に帰国された際、もしくは中城村に残った家族や親戚とのやりとりの中で、南米にしか分布しないC.baccatumに属するトウガラシを持ち込んだのかもしれない。それが中城村で自家採種による栽培が続けられて「チゴレ」として現在まで受け継がれてきたのであろう。いずれにせよ、この在来品種「チゴレ」は、日本でも中城村にしかないC.baccatumに属する在来トウガラシである訳なので、希少性は高く、今後の地域資源としても期待できる。さらに、その伝播の経緯経路や時代が明らかになれば、地域の歴史を語るトウガラシになることも期待できるので、その解明が望まれる。

● 松島憲一さんプロフィール

信州大学学術研究院農学系教授。博士(農学)。専門は植物遺伝育種学でトウガラシやソバなどの遺伝資源探索、遺伝解析、品種改良および民族植物学的な研究を実施している。また、それら研究を通して地域活性化についての支援もしている。信州伝統野菜認定委員。



トウガラシ博士が行く!

地域野菜あまから訪問記

日本唯一のC.baccatum種トウガラシ —中城村のチゴレ

信州大学学術研究院農学系教授 松島 憲一

栽培5種

トウガラシには5つの栽培種があり、そのうち日本では「鷹の爪」や「しとう」もしくはピーマン類が属するCapsicum annuumという種が最も一般的である。さらに言うと、全世界的に最も広く分布しているのもこのCannum種である。日本には、この種の他にも、「島とうがらし」として知られる沖縄の在来品種が



中城村の在来トウガラシ品種チゴレ

C. frutescensに属しており、この種は世界の熱帯、亜熱帯地域に分布していることから、アジアでも沖縄の他、東南アジアや南アジアでよく見かけるトウガラシである。一方で、在来品種ではなく、最近、日本に導入された品種でいうと、激辛で有名なハバネロや、ギネス記録を持つ辛さのキャロライナリーパーなどはC. chinenseに属する品種であり、近年の激辛ブームに乗って日本でも種苗

が流通している。しかし、残りの2種、C.baccatumとC. pubescensは主に南米で栽培利用されるに限られている。

沖縄の在来トウガラシ畑

さて、今回も引き続き、沖縄の伝統野菜のお話。2025年2月、今後の沖縄での伝統野菜についての品種保全や生産振興について勉強しようということで、沖縄県農業研究センターで「島野菜情報交換会」が開催された。日本の伝統野菜研究の第一人者、山形大学の江頭宏昌教授と共に私もその会に参加して、意見交換を行ってきた。

前回の本連載でも紹介したように情報交換会の翌日は、中城村で島ダイコンの生産現場にお邪魔したのだが、それに引き続き、同じ中城村で3種類の在来トウガラシ品種を栽培している畑にも訪問することができた。3種類のうち1種は白い花をつけるので日本でも一般的なCannum、もう1種は緑白色の花をつけるC. frutescensのようだ。このC. frutescensについては前述の通り沖縄の在来品種である「島とうがらし」がこの種に属することから、いわば沖縄では一般的な種であるといえよう。